

2
松竹草
卷之五

13
964
5



門遠 13
號 964
卷 5

本清

信夫摺在

浪花 信夫摺在原双紙卷之四

浪花

中川昌房著述

東都

感和亭鬼武校合

業平夜趣高安里
井筒姐詠歌顯操

夫子矢之曰予所否者天厭之天厭之
聖孔子も
南子も
いふも
既ゆいぬ
方よ
室原より

室原草

下より一、夜前五条、此、彼、駭、動、不、及、い、高、子、姫、の、り、術、
知、る、事、は、し、業、平、を、以、て、守、護、の、為、に、付、金、の、所、は、ま、切、
り、物、筋、の、か、り、と、一、姫、君、行、漸、乃、知、是、事、の、い、や、人、を、驚、
固、の、地、筋、を、り、り、而、あ、る、は、事、お、ち、る、ま、く、い、業、平、解、
官、し、て、石、上、の、高、子、の、禁、を、し、名、男、と、も、は、此、の、
五、事、よ、り、飲、る、の、版、を、り、市、外、に、業、平、は、し、
る、も、此、筋、も、り、あ、る、い、や、ま、入、り、て、市、筋、を、や、り、
行、ふ、く、追、立、此、官、人、進、入、事、の、市、筋、を、出、し、ま、い、
ら、せ、石、上、へ、送、り、な、る、ま、の、乃、字、を、引、く、と、あ、る、
を、事、此、死、人、と、り、た、ま、い、泣、く、者、常、が、此、の、若、存、
た、る、事、の、い、り、と、一、越、せ、た、事、い、る、若、氏、乃、人、と、

十、事、計、畧、仕、負、せ、た、ま、い、ま、い、禁、庭、を、進、い、退、
り、け、よ、と、兄、の、り、平、を、も、事、実、な、れ、と、一、入、ん、場、を、り、
若、り、る、と、一、事、も、あ、り、有、事、の、極、藏、姫、の、井、原、姫、の、聲、
鉅、も、ま、た、余、義、な、り、り、は、一、若、井、原、姫、の、居、間、に、入、り、
ま、い、一、事、姫、い、ま、と、此、を、事、貞、實、此、此、め、あ、り、と、一、事、
業、平、は、を、主、買、此、と、一、事、教、い、を、付、ま、い、せ、一、事、物、筋、の、
事、を、知、り、付、け、た、事、い、ふ、た、事、は、後、も、事、事、の、間、に、
引、延、し、て、禁、庭、の、市、裁、判、を、事、た、せ、あ、り、一、事、
日、然、を、送、り、内、に、成、り、足、立、茶、平、あ、り、と、一、事、入、事、の、
業、平、は、を、事、ふ、ま、い、ね、き、ま、い、せ、と、一、事、あ、り、と、一、事、
と、い、事、姫、の、り、術、を、り、た、事、い、一、事、若、氏、乃、人、と、

かろ平高安の里
生駒姫のふ
通いたまふ



乃人これ申置きし所之人を預せんて子とせし
 字ありしゆりたりまふ付高子姫の所り漸を
 出さる時この所之人は所中傳のおぼゆる事少く先
 而る方こそこの所をぬれおぼゆる事少く一向小
 くれなくゆいしおやうし時ゆりあはれい内閣高
 安し中よま高安郡司丹波外佐伯忠雄しりおあり世
 彼所をぬれ彼乃上らる所休山といふふまふ大を
 持たるの所ゆをまふゆりしおありしゆりの所
 けおよりまふゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 ハ名もやせしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 別け高安乃里ハ基経ゆのゆ支配配ふゆりかふゆり

以高子姫と其夜より直まかりこへ隠しまひし
 けをたしふふふと届きり早速立越り実を
 つけそのゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 けけしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 らもまきしゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 美しゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 子姫此所在所をゆりしゆりしゆりしゆりし
 度よりゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 つふふゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 免のゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし
 見ますし一面のまふゆりしゆりしゆりしゆりし

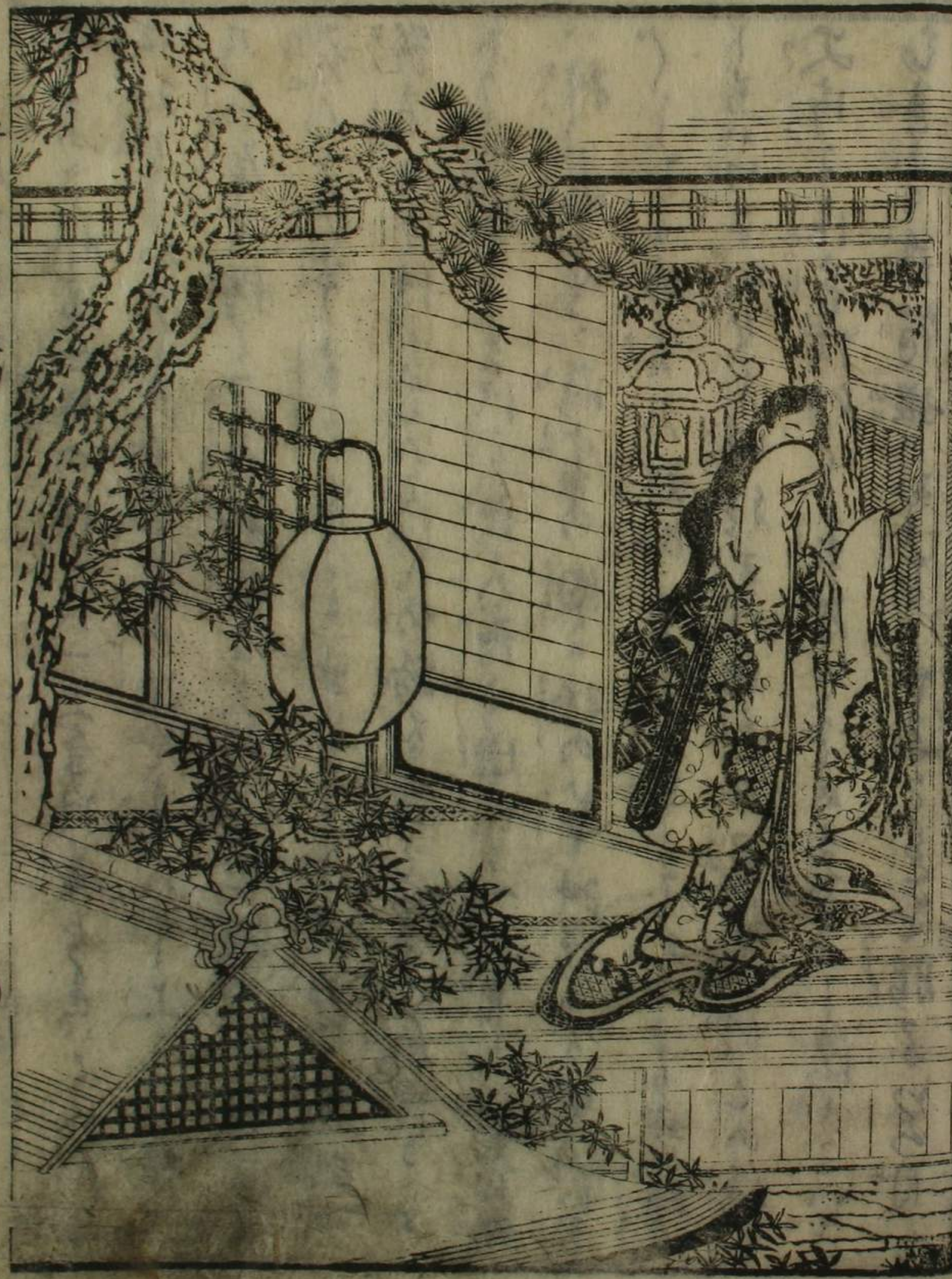
逢もまたいつかして真偽をわたりて玉流膝をま
 ずりせし高儀よりやびいしがやわけく業平いつく
 幸いなる子かごころ高儀那可が女児の生駒姫と云
 のと年二十歳と申すふいふ筆撰しといま定むるま
 もふいと思ふふぐう我君申すゆきとく風流のほし
 う一絶並の美男なる事い世の人もようかたけあ
 志うまばかの生駒姫と君より通の御書を送らせし
 御ゆえに生まんあふふらこびく魔きなるべし那
 たりをわたりかこころかうきせたるい後ふあふ
 う結めとらたうの娘をいづう隠し至るも高き姫の有
 事又夜うらんこ其やまをさぶらまの御書を送

うらんふい真しきふらちあそ御家の生仕女より高
 生乃若かり彼を以てけ性を仕員せし次へし勅
 らせし高儀平岡しなま今勅勅乃身うら女を
 引を送らん申す怪多しといふも計畧乃高儀は
 初まきとあはれ又井筒姫と貞妻院女たりとも佛の
 いまう結ぶ面と若葉のゆきといふも内心を夜
 西似そりし物もバリや怪事娘姫より子を懐きま
 しきふあはれぬけり陰高きすべし秋て紅葉の
 高儀あはれぬ高儀あはれぬの文作をこまめと娘そ
 りうたまた高儀平八所玉章を文取立御門の
 下女をかたし被が古口高安へ傳してこの文を生駒姫

うらりたる富家の身あつても在座その生約姫
其比壺の人乃呼ぶも業平は大内を奴の風雅人御通孫
子瑕が面影も新ありぬへきとす乃入はる齋日人間乃
残るぬ味の園生をきし身身く地下の女は魚想文
なす海をいむくふをいふはる月夜やとせまふ
等親清のゆきぬあふにら道方ぬつりめあふ
この市返事や下よりあふ侍女の口さがるりりち
すもろふを生約姫のいりりる高位の市方よりりち
せ強えんの玉章をききぬるるるるるるるるるるるる
乃つて免も後めくくたゆふ風俗を侍女もあふら
らる取くくさをもらちるるるるるるるるるるるるるるる

かゝは人知れを通る色も人伝をせらふたまましくり
よれ返事よ業平は海は足も里くりくくくくくくくくく
夜入りく大和の石上より河内國高安までい余程の道と
いせく次立野越よりかろくせまふけくくくくくくくく
折節生駒姫現乃あを汲んくくくくくくくくくくくく
も業平はなへ来くせりい初くくくくくくくくくくく
この水と意乃水く名付くくくくくくくくくくくく
侍りつけく生駒姫侍女もくくくくくくくくくくく
山畑村の中くはる今い山畑
村の一人くくくくくくくくくくくくくくくく
市女のをあふ強くくくくくくくくくくくくくくく
かろくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

正徳三年春



正徳十一年



井筒姫
詠多にて
貞操を
あかし

古風草子巻四

せまふさねも心申の由をハ一太事此をなまむかむ
 口封りかきし志どく名海をなぬしよく彼姫
 乃ん屋を降し又使け後より高子姫の由を
 乃ん屋とけ事申馬色も出さるる只生駒姫の
 艶色ふた侍もそとるぐの路を通さるる風情
 ちうてあつてまはに夜更夜と通いよは自ら井筒姫
 ハ種り淋しき蔭室の由も枕の夢枕泣り思ひ
 ぐくかき睡言乃起仰てふ赤葉にておとすゆ人侍女
 ともハ口さがらけ経買ハ毎夜の思ひ歩りこの後
 又市又由岩所ハ意後いまもあつて終つていさ
 ちもども井筒姫ハあつてやふこを眼ふり月も

たう勅助の由身も他りを降せたまつて市丸
 たきうん又夜ハ人目もいさるるすこしハ由
 させたふ多歩の何ともうらみありあきた
 たかつ詞をわけて後よりおぼし女乃道を
 かあだくふか事申かきそりも鳴るハ井筒
 ちう侍女も何をいさるる市姫さまが結
 乃んかやくつふやく申士アふ業平ハハ
 ちうとまらうの至新越もあもあきたま
 ちうちうておとす市丸あつてゆかぬ
 侍りり石の岩一橋おけ用意の市丸
 休息しておとすけ石の鳥帽子石
 ちうちうの名物

け石の鳥帽子石

新する由ハ

又てわがうらみ今宵は結ぶうらみとす逢ふ石
 ちよまかへしうらみがあふても井筒姫新夜
 あはれうらみあはれうらみあはれうらみあはれ
 氣に惚ぬの糸をさす惚ぬ人をあはれむい女のたしひかふ
 不男儀たる彼が惚ぬ但し又ゆゑあはれむあはれむ
 有ておぼえをまひし其子と引入まんたうらむらむ
 うらむらむうらむらむうらむらむうらむらむ
 て彼が惚ぬを何いふんとさうさうさうさう
 て前栽植色の石ふちとかくして肉の有さませませ
 此も夜にさすもさうさうさうさうさうさう
 うらむらむうらむらむうらむらむうらむらむ

て西の空を打海めかたむく内もあはれうらみ
 狹うらむらむうらむらむうらむらむうらむ
 うらむらむうらむらむうらむらむうらむらむ
 大切乃ゆ身もて供をも具したまふ只ま個か
 たまふその心苦しあはれむらむらむらむらむ
 此をさすうらむらむうらむらむうらむらむ
 いらむらむをわゆる居はまふらんうらむらむ
 をゆらむらむらむらむらむらむらむらむ
 風吹し沖はあはれむらむらむらむらむらむ
 と一宵の和歌はあはれむらむらむらむらむ
 ええうらむらむらむらむらむらむらむらむ

在厚草卷四

や玉の比^ひより七^{しち}首^{うぶ}いづ^いま^まの^のせと^との^のく^くの^の氷^{こほり}の^の後^{のち}の^の
く^くの^のた^たき^き彼^かの^の心^{こころ}を^を救^{きう}ひ^ひの^のが^が心^{こころ}を^を取^とり^りけ^けき^きせ^せ
ま^まの^のき^き高^{たか}く^く音^ねの^のけ^けは^は娘^{むすめ}君^{きみ}に^にま^まれ^れう^うの^の涙^{なみだ}を^を
か^かく^くし^しよ^よう^うこ^こび^び乃^のを^をあ^あま^まさ^さく^くけ^けと^と五^ご門^{もん}に^に我^{われ}を^を問^とふ^ふ
体^{たい}り^りく^く入^いり^りた^たま^まふ^ふけ^け後^{のち}は^は中^{ちゆう}将^{じやう}も^も市^{いち}兵^{べい}衛^ゑを^を務^むめ^めを^をせ^せ給^{たま}ふ^ふ
と^とて^て四^し方^{ほう}の^の河^か内^{ない}か^かう^うい^いも^も尚^{なほ}居^いり^り居^いり^りが^があ^あら^らは^はす^すあ^あ
か^かう^うと^とせ^せま^まふ^ふを^を致^{いた}す^すは^はあ^あら^らま^まに^に二^に条^{じょう}地^ぢ后^ご地^ぢ市^{いち}有^あ
家^けを^を持^もつ^つと^と志^しらん^んめ^めを^をま^まを^を存^{ぞん}じ^じお^おぼ^ぼし^しと^とさ^さら^らし^しめ^め
て^て今^{いま}そ^その^の身^みを^を生^い駒^{こま}娘^{むすめ}を^をま^まか^かし^して^て后^ごの^の切^き体^{たい}と^と思^{おも}ひ^ひ
もの^{もの}と^とい^いく^くよ^よも^も市^{いち}兵^{べい}衛^ゑも^もい^いさ^さく^くし^し山^{さん}路^ろを^を越^こえ^えか^か
こ^この^の玉^{たま}の^の樹^きの^のう^うら^ら門^{かど}より^{より}君^{きみ}び^びの^のう^うら^ら切^き戸^{かど}を^をま^まり^りせ

た^たま^まも^もか^かう^う戸^{かど}を^を開^ひき^きて^て開^ひき^きは^は扱^あけ^け後^{のち}少^{すく}後^ごに^にゆ^ゆ
他^たの^の人^{ひと}と^とか^から^らま^まり^りど^どか^かく^く戸^{かど}を^をせ^せつ^つた^たり^り人^{ひと}と^とか^から^ら
御^ご去^その^の東^{とう}を^を向^{むか}ひ^ひ一^{いつ}宮^{みや}地^ぢ有^あり^りを^をま^まり^りゆ^ゆを^をさ^さす^すの^のと^と
き^きま^まあ^あま^まこ^こい^いる^る生^い駒^{こま}娘^{むすめ}ハ^ハ縁^{えん}の^の際^きを^を越^こえ^え飯^い櫃^びを^を出^だし^し
自^{みづか}ら^ら飯^い櫃^びと^とま^まり^り若^{わか}く^くも^もあ^あま^まを^を會^あひ^ひて^て在^あり^りゆ^ゆ
な^なり^り平^{ひら}け^け侍^しを^をえ^えた^たま^まい^いお^おし^しら^らた^たり^りき^き業^{ごう}を^をな^なす^す
多^{おほ}く^く地^ぢ侍^し女^{にょ}を^を石^いを^をい^いた^たから^らま^まり^りか^か子^こさ^さの^のき^きる^る
や^やら^らる^るこ^こん^んを^をげ^げ里^{さと}の^の女^{にょ}も^も井^い首^{くび}娘^{むすめ}が^が貞^{てい}女^{にょ}を^をま^まり^りて^てあ^あま^ま
し^しの^の天^{てん}地^ぢを^を泥^{でい}の^の連^{れん}た^たり^りし^しあ^あら^らま^ま今^{いま}は^はあ^あら^らま^まあ^あら^らま^ま思^{おも}ひ^ひ
この^{この}ま^まり^りか^かつ^つて^てい^いち^ち切^きり^りる^る因^{いん}事^じ遂^{すい}に^にし^しと^とお^おり^りい^いと^と切^き
より^{より}ま^まり^りい^いま^まは^は生^い駒^{こま}娘^{むすめ}ハ^ハ大^{だい}い^いま^まに^にま^まり^りき^きな^なら^らま^まり^り

三原草集卷四

〇ナ



原直谷巻四



在原直谷巻四

生駒姫
業平の
後を
追まう
外河
くちく
入水

獲をもをこひあくか〜庭より下りて五五切戸を開き〜内へ
 付い入まをまじバ娘も必定この有るを〜と云せせし
 け〜ん〜恥し〜ふ面をほろめさ〜川もき〜洞あ〜業
 平作よ〜い色けほ〜志のらひ〜く〜画ひ終も多し
 たり〜ら〜いおあ〜〜また〜〜やほ〜んとおあ〜を
 まふ〜生駒娘を差こぢ入〜ん〜よ〜た〜き業と
 又せま〜〜せ〜面作〜〜せ〜人〜の〜何を〜か〜
 系〜せん〜あ〜あ〜い〜切〜り〜大〜切〜る〜ゆ〜方〜を〜終〜る〜最
 さ〜終〜ほ〜〜終〜り〜使〜あり〜其〜ゆ〜方〜と〜こ〜い〜つ〜き〜ゆ〜り
 け〜り〜あ〜の〜事〜ま〜て〜係〜の〜用〜意〜よ〜厚〜家〜い〜よ〜を〜と〜く〜終〜ぎ
 あり夕飯の〜も〜あ〜つ〜も〜出来〜ざ〜り〜し〜ゆ〜め〜〜い〜づ〜う〜〜

徳ゆらを出りあか〜面自〜〜物終りあたり平作〜の
 終り〜ゆ〜方〜と〜基〜終〜の〜妹〜さ〜子〜娘〜い〜あ〜〜ぶ〜か〜〜回〜を
 け〜り〜ば〜ゆ〜も〜よ〜も〜志〜あ〜〜ゆ〜〜目〜し〜そ〜ろ〜子〜娘〜ら〜あ〜
 先〜よ〜け〜あ〜を〜出〜さ〜せ〜し〜い〜し〜い〜あ〜〜〜さ〜ら〜ふ〜業〜平〜い
 で〜進〜付〜〜実〜吾〜を〜正〜し〜あ〜〜ん〜と〜生〜駒〜娘〜い〜返〜せ〜も〜あ
 一〜に〜ま〜〜〜を〜襦〜ひ〜あ〜げ〜〜け〜あ〜を〜走〜り〜出〜さ〜ふ〜勤〜勤〜知
 ね〜も〜生〜駒〜娘〜い〜何〜ゆ〜〜か〜つ〜〜せ〜ま〜ま〜我〜終〜く〜ま〜せ〜ま〜で
 回〜〜〜後〜〜〜い〜進〜り〜け〜あ〜〜〜既〜〜道〜の〜程〜を〜つ〜て〜も〜未
 だ〜ま〜あ〜〜後〜〜〜り〜娘〜は〜徒〜然〜〜〜襦〜ひ〜ゆ〜〜ふ〜出〜来〜ま〜い〜道
 か〜ま〜〜〜〜〜ら〜ま〜ち〜を〜必〜定〜好〜し〜て〜〜ま〜を〜と〜放〜け〜ま〜い〜
 つ〜い〜せ〜ん〜と〜情〜け〜る〜志〜あ〜〜〜樹〜木〜は〜あ〜〜〜ふ〜け〜枝〜〜き

石原直典書四

上より所為をかくしておろしつゝまゝに生駒姫げんまゝに
 追ひつけ来るしりぎ更しゆりぬもまゝに候に我よりき
 こざよきおもつき遊して遊せさむいゝやとささく我よ
 りあまもつしせまはたあゝ何よせんせめいゝまゝに
 たり貞女の様をえせまゝせんしりたりたる小石を控ひ
 て西の神よ入ま一首の終よ

君が何よりえはくもつたん生駒山をな候しを雨を降
 こも降世を強し路傍たり池のうらふ入りの終よ
 むらゝゝちりあふささくお玉りてけ池をを別きの
 水く号幻高安郡林立村しりあふ其古蹟を候し
 このを村嫁入り女いふけ池の傍を通らむと又お

の甲ふかぎりて末代まゝも一軒ととも末向は家を咽
 ざら世乃人純より知る所あり

蒙勅在五下吾妻
 千方伏兵襲中将

昔今春和天皇高子姫の美人たりしをほのかに敵國
 ありて入内させし頻々基経國経の両は(勅)あふび
 かしりし故傷さつたがたに河内國高安郡日かか
 候しおきし姫をを京都へ侍の帰し吉日良辰と候
 女侍よさし上たきよ是刻二条の店あを新姫美初
 原をいり降りあふ上ハ業平の勅勅も降したりてと
 天下乃人口防ぎがく品科を免許あけり候へし

入るべきも極まりしより又りや高野の人々もあつたり
 又乃びいかり平と移りて皇人てはまづうへへは彼ハ
 名席又回意し一惟高君を召立てる子とあつたりをりて
 亦身も高野の海を鼓勇を震えんとし又要心され
 ことあつたり志もきても勅令は定まらざる上ハ直ハ
 召かへし又も半畧をりし退人と極致しけるを
 ちりめまつせ又く為事をせりしあり又業平はハ高
 野に於て二条乃后の侍り侍を志しり高野に在りて
 飛んと後より追へけりしものもそ終つたりし也其後
 ハ右上院結ぶかつりけ上ハ右の方を奉圖をりて勅令
 を然い出んと評定乃西極めあつたり侍出

有しゆ人子速上素たりしなすふあふ今度高野の宿
 業おれりしゆ人召かへしその内りしなすふ其は
 こいよよのり業平乃れ料を赦免あり極致し
 かつりし本意もあつたりたすふ勅令をりし
 業平乃れ料を赦免あり極致し
 其は業平極致ありかきりし作下りしハ
 ちるあつたりし業平乃れ料を赦免あり極致し
 通じりしあつたりし業平乃れ料を赦免あり極致し
 作付しふ其は業平乃れ料を赦免あり極致し
 極致しし中御業平乃れ料を赦免あり極致し
 極致しし上御業平乃れ料を赦免あり極致し

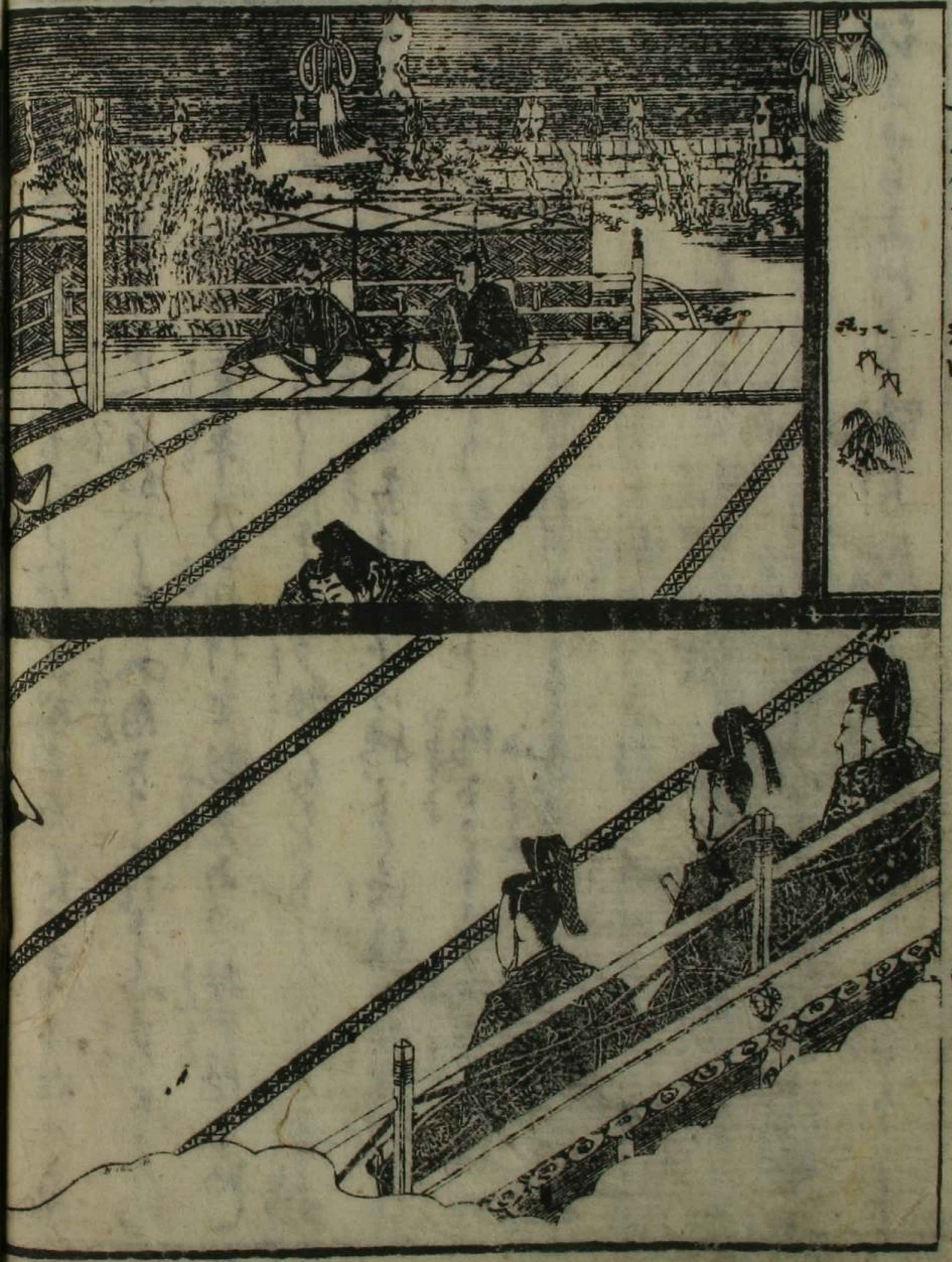
正徳天皇御紀 卷四

四十四



業平
執事
長
名席
村
空
を

上野



右原草

東國より内通乃びうらゝしむるをいふ。油遣は異本
 の下向し名席をおもく首を献上せしむ。有常は
 現在名席が兒子たちも父と合伴せしむるは白く
 けし其科ありしつても友位をうよらきて今もその
 執事其の足りゆもかまが女見も極あまば速く名席を
 おもく其身の懐ををあしむる。か副將をも極よく
 軍をもりし。たよふは寺にても。當時名席其をよ
 さたりなきにに出波時ありし。志すはバ大軍を以て追討
 使下向しつば法をうきまし。身を隠くも法は
 医中の只いふ人殺しに。此は彼地より利をせし友府
 を以て出羽奥州に軍勢をかきりし。わし。子速く

將軍を奏し給ひ。何天子より大政治家。沢野の諸部
 カトリ。陽より執事難く。頂戴して速く兵を出陣せ
 し。の嚴しむなり。業平細をすし。名身。おもく息
 子の後極をきけ。は又折る。辞退せしむ。しあふ
 せし。おもくし。て是。おもく。氏。は。今。業。興。と。後。り
 こ。都。は。い。お。も。く。し。て。い。し。し。事。果。た。し。し。り。事。果。た。し。し。り。事。果。た。し。し。り。
 親。を。き。事。初。あ。い。ん。ふ。り。ハ。權。は。孫。東。より。り。て。時。節
 と。待。べ。し。其。内。折。を。得。く。名。席。と。お。も。り。首。の。り。て。は。
 よ。ら。く。た。は。折。い。て。ま。ぬ。べ。し。何。ら。も。せ。し。け。体。を。事。致。す。
 り。何。し。を。折。り。な。計。の。た。り。ふ。御。と。う。し。な。は。ん。と。論。く。思。
 ら。あ。け。く。愛。護。と。く。折。を。中。節。刀。友。府。を。頂。戴。

やがて禁庭をとり再び石上へ歸つて來り禁庭の人を
 召し出し作あたりにこのたび攝政より急務が討ちを
 奉りし所へたすふ所を尋ねて海をこぎ有常の御孫
 召し出さしけ方よりのぞむもけさの赦免あるをきこむ
 たるふ是を以て考へ見れば業平を討つては事をも
 ころぐ乃東國へ下りまきそを留め見たりやも
 ろおし我の兄弟とわいのわい退かさんといふの計畧
 と推察せりまうといへも天子の御心へあまが事
 辨退せば遠物の答をまへといまごふの方角は人知
 らざらぬ出羽奥州へ少人数といへ下向せん事ハ乃
 大年の涯の浮沈この時よりいへし海ありあはれ

公座を渡さし後をいへしとゆふも一座も座をいへ
 といへし出も若ふし未座を去り守利三郎といへし
 いへし我君乃命のいへし辨退せば遠物乃御心は
 所下向あはれ不知あはれ縁縁本筋はあはれまはれ
 我もいへし何れもいへしこの屋敷の人への心を陥つるの
 事畧ならん大将のいへし所下向あはれ左軍二三方
 も水がいへしいへしいへしいへしいへし復員作は
 下さすといへしいへしいへしいへしいへしいへし
 業平のいへしいへしいへしいへしいへし禁庭よりの
 物にいへし名簿がいへしいへしいへしいへしいへし
 このいへしいへしいへしいへしいへしいへしいへし

それを討つもの初めたりまゝに大軍きて下向するも
 敵の名所をかきふかきりて北東夷のやに赤心を成せ
 樹を断り待受け中絶に於て不意を討人も半鐘
 男いもよりぬ雨さく敵の休戦かよ出合たりたす大軍
 ありとも敗軍せんて西をどり多し此者軍を討て
 又若くは東夷の事人あひあひ恥辱もたりぬは
 けろくあひ又るふけり年を
 在ぬくめて女ふもり敵を斬り振舞多く好む
 めのものなりし世の人まじりていざをさ
 いか本かよあひまじりて當時の朝廷一天の事
 成威をもちめこれ九人なりして九人まじりて
 後東夷

ゆに地を姓するもの政通なはれまじり時に忽し人の
 たつて徳ををかしくむ実のゆゑなるもあはれい
 死に死にたり既にまじりて紀氏を孝元天王の
 末孫武内大臣乃後配世に朝政を執りあたりて智
 王徳星のゆゑに大臣をなすなり時にその
 人のついでに本を名をたつてまじりて昔に昔に
 今名氏朝政をまじりて紀氏に後裔おとびんとす我
 ち東夷もせのまじりて名氏の名ふはるる事ゆゑ
 かりゆゑにせはるる事ゆゑに業多し女はあはれ
 だもさむやの中を廢き者し思はるる彼あかか
 おき時せりてあはるるをたき場あをのがるるが

なりこれに以てこのさびつのも候あり業平を
 家林の所ふを業平姓方へ下向せしむ披流し加給ての
 色好くならむは多く姓美めと名をたしむ馬の口より
 仕下皆りちすどもは後身より女を以てし務をかざらせ
 美名をまして海を隔て極くたふし海を渡りて業
 平美めをたすまてそのを業平と名をたしむ國へ又帰して
 又物乃男女たちまてそのを海を渡りて井宿船は且面体
 物好くもふはふよよく似たり其正女も下も才知ありて
 不勤せざるに度るもふもいふる所は是はかきを
 男姓形もやゆ業平ありし候ゆゆゆ中野國の
 考ふは男姓も是もよよく武藝を短は又熟し且勇力す

くらき女もよよバるる前も彼をもち候は候はしりして
 我も是之業平を剛三郎ふとの勇士と仰ふ十人なり
 を随へ旅客の体は次めをか一同をを思ひて真抄もる
 べし此のよき計ひたを決定しよきを頼みくせめ井宿
 娘とまての業平ありし候途申す計五人と来た
 其時よき不意な討し出され候は務村を得人し疑
 あり是等一といふ系家の人ふゆをゆりて次計畧まて
 後氏乃強くの果若利名姓難をまぬるに二つふハ
 踏次のるふて悪意も姓不意を妨ぐべし二つふハ
 名馬の千方なるの朝敵まのい事ゆゆ我を喜せ
 んとすゆゆは多く姓人を喜させしりてたやまて歌と生



いづれ
娘なり乎と
たのしみ
あづま
とらふの
園



其
一



其
二

其
一

捕へし時ふ、忍持が姉の仇千方が在由と云り彼より
 せし本意を達せし人かまこを以て其利多か
 や、毒計を作出さし、其終つては、
 よりまうべくおしなり、一統は領事不及び、
 業平の右の用意を急ぐせたまひこの年月
 一はすい、決雨の女中、ちを招きけり、
 うらむ、
 東女へお枕は下向もは路乃同石連けん
 一あま、
 二知美をうさり、
 美女乃の箱、
 待衣は若掛、

細乃古刀を招き、
 忍持が、
 一め、
 友人、
 忍持、
 出、
 足、
 井、
 我、
 出、

忍持草子

十一

乃^乃体^乃ふあま業^乃平^乃、回^乃転^乃かふ近^乃付^乃津^乃の業^乃平^乃、と者^乃わこれ^乃をた
 けし又^乃ふ彼^乃いて下^乃を^乃返^乃ぬの美^乃房^乃なるよふ和^乃歌^乃のま^乃人^乃た^乃ま^乃は^乃何^乃卒^乃
 を^乃あて^乃難^乃題^乃を^乃し^乃を^乃出^乃し^乃一^乃首^乃を^乃の^乃ら^乃み^乃ま^乃ら^乃ん^乃さ^乃ま^乃を^乃以^乃て^乃是^乃
 と^乃感^乃る^乃ち^乃、ハ^乃忽^乃虚^乃テ^乃ハ^乃明^乃白^乃なるん^乃必^乃あ^乃や^乃ま^乃り^乃本^乃なるれ^乃と^乃妻^乃
 中^乃含^乃め^乃く^乃迷^乃たり^乃、^乃兩^乃個^乃語^乃て^乃宗^乃基^乃の^乃中^乃人^乃う^乃流^乃あ^乃ら^乃う^乃ハ^乃語^乃の^乃同^乃て^乃
 業^乃平^乃が^乃首^乃を^乃ら^乃く^乃持^乃つ^乃て^乃返^乃し^乃て^乃日^乃夜^乃を^乃ま^乃か^乃た^乃を^乃海^乃原^乃筋^乃と^乃よ^乃て^乃
 才^乃の^乃名^乃を^乃ら^乃り^乃と^乃上^乃下^乃の^乃橋^乃の^乃中^乃に^乃あ^乃ら^乃ん^乃て^乃女^乃中^乃何^乃ま^乃も
 体^乃も^乃通^乃あ^乃ら^乃ず^乃体^乃も^乃ま^乃じ^乃ら^乃れ^乃を^乃座^乃ま^乃の^乃中^乃に^乃あ^乃ら^乃ん^乃て^乃何^乃個
 八^乃た^乃が^乃い^乃ら^乃う^乃な^乃づ^乃き^乃ら^乃い^乃津^乃依^乃の^乃者^乃を^乃終^乃て^乃業^乃は^乃江^乃の^乃津^乃前^乃に^乃出
 ん^乃と^乃計^乃算^乃を^乃し^乃り^乃け^乃れ

信夫摺在原草紙卷之四終

